

薄井憲二バレエ・コレクション

『火の鳥』～初演100周年～

“L'Oiseau de Feu” ～100th Anniversary～

vol.26

2010/6/24 (Thu.)～2010/7/13 (Tue.)

出展リスト (作品・資料名/分類/年代/ほか)

◆バレエ・リュス ハウスプログラム『火の鳥』
(プログラム[PRBR-HP-160] / 1912年 / ロンドン)
House Programme of Russian Ballet, Season of Russian Ballet “L'Oiseau de Feu”
Organised By M.Serge de Diaghilev / 1912 / London / 25.3×19.0cm
(PRBR-HP-160)

◆[ロシア・バレエ団] 著者: A.E. ジョンソン、ルネ・ブル
(書籍[BK-231-br] / 1913年 / ホートン ミフリン社、ボストン、ニューヨーク)
Book “The Russian Ballet” Author: A.E. Johnson, René Bull / Publisher: Houghton Mifflin
Company, Boston & New York / 1913 / 29.4×23.5cm / English (BK-231-br)

◆『火の鳥』 著者: ミシェル・セヴィエール
(書籍[BK-216-pj] / 1919年 / C.W. ボーモント出版、ロンドン)
Book “L'Oiseau de Feu” Decorated by Sevier, Sevier hand colored / Impression of the
Russian Ballet / C.W. Beaumont, London / 1919 / 25.5×18.7cm / English (BK-216-pj)

◆『火の鳥』を踊るタマラ・カルサヴィナとアドルフ・ホルム
(絵葉書[PC-0157] / 1912年 / エミール O. ホッペ撮影 / ロンドン)
Postcard of Karsavina, Tamara in “L'Oiseau de Feu” with Bolm, Adolf by E.O.Hoppe /
1912 / London / 8.6×13.6cm (PC-0157)

◆『火の鳥』を踊るタマラ・カルサヴィナ
(絵葉書[PC-1257] / 1992年 / バリ国立図書館)
Postcard of Karsavina, Tamara in “L'Oiseau de Feu” / 1992 / Bibliothèque National de
Paris / 15.0×10.5cm (PC-1257)



Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二バレエ・コレクション

『火の鳥』～初演100周年～

vol.26

2010/6/24 (Thu.)～2010/7/13 (Tue.)

火の鳥 / L'oiseau de feu

全1幕2場

初演: 1910年6月25日 パリ・オペラ座

音楽: イーゴリ・ストラヴィンスキー

振付: ミハイル・フォーキン

美術: アレクサンドル・ゴロヴィン

衣装: アレクサンドル・ゴロヴィン、一部レオン・バクスト

台本: ミハイル・フォーキン (ロシアのおとぎ話が題材)

出演: 火の鳥-タマラ・カルサヴィナ

イワン皇子-ミハイル・フォーキン

カスチェイ-エンリコ・チェケッティ

美しい皇女-ヴェラ・フォーキナ

*衣装・美術は1926年にナタリア・ゴンチャロフによってデザインし直され、現在の多くの
バレエ団ではこちらが用いられている。

『火の鳥』はバレエ・リュスの作曲家としてまず名前の挙がるストラヴィンスキーの西欧デビュー作品、そしてバレエ・リュスにとって本当の意味で初のオリジナル作品という点でも非常に重要な作品である。それまでの上演作品は既にロシアで上演されていた作品であったり、その一部を用いたものだったのである。

この作品でセルジュ・ディアギレフは本領を發揮し、台本、振付、音楽、美術といった全ての要素を一から作り上げたが、以降のバレエ・リュス作品はわずかな例外を除いてすべてのように作られることになった。

ロシアのおとぎ話がテーマで、ロシア的な雰囲気や富んだ色彩とデザイン、そしてカルサヴィナの当たり役として人気演目となった。1921年まで上演された後、1926年に美術と衣装はナタリア・ゴンチャロフによってデザインし直されて再演された。その時、上演が途絶えていたために忘れられていた振付部分は、かつて踊ったダンサー達の記憶によって再現された。

金の果実のなる木を守る火の鳥がやってきてイワン皇子に自分を矢で射ないように頼む。その代わりに自分の羽を2枚渡し、何かあったらこれを振れば助けることを約束する。場面は変わり、カスチェイによって魔法がかかられていて夜しか出られない姫達がやってくる。皇子と美しい皇女は一目で恋に落ちるがカスチェイが登場しその時は続かない。困った皇子が羽を振ると火の鳥が現れ、カスチェイの命の元である卵のありかを教えてくれる、その大きな卵を割るとカスチェイは死に、魔法が解け、姫達が現れ、石にされていた若者たちが目覚め、王子と皇女は結ばれるというのが大筋である。

今でもいくつかのバレエ団で上演され続けている。

次回予告

薄井憲二バレエ・コレクション Vol.27

アルトゥール・サン＝レオン

～『 Coppélia 』を振付けたダンサー～

Arthur St. Léon～Who choreographed “Coppelia”～

ロマンティック・バレエの名作を多数振付けたアルトゥール・サン＝レオン。
ロマンティック・バレエ時代のスター・ダンサーであるファニー・チェリートが妻であったことも意外知られていないかもしれません。彼の活動を写真と共に振り返ります。

(期間: 2010/7/15～2010/8/1 於: 2階共通ロビー)

◎企画・監修

芳賀直子(はが・なおこ) / 薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

Naoko Haga (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)